

---

翻 訳

---

## ハンス・フォン・ビューローの生涯

—— 1864年～1869年 人生の転換点 ——

マリ－・フォン・ビューロー

最 上 英 明 訳

十八歳のルートヴィヒ2世がバイエルン国王に即位したことにより、ヴァーグナーの幸運の星が輝き出した。国王から派遣された使者がシュトゥットガルトでヴァーグナーの居場所を見つけたとき（1864年5月2日）、ヴァーグナーはウィーンの債権者たちから逃れるために、まさに荒野にでも消えようとしていた。債務もなく、責め立てる債権者たちもいない国へ魔法で連れ去られたかのように、ヴァーグナーは突然、芸術のためだけに生き、取り巻きとして認められる者だけを周囲に集めることができたようになった。「ヴァーグナーは私にできるだけ早くミュンヘン近郊のシュタルンベルクへ来るように要求してきました」。ビューローは素晴らしい若き国王に《ニーベルング》の音楽のイメージを伝える役目を担うことになるという。「君に国王への責務を担ってもらうことにした。君に報酬を払って、《ニーベルング》や《トリスタン》の音楽を演奏してもらわなければなりません。《マイスタージンガー》もあるが、これはまだ先です」。ヴァーグナーからの招待には、「奥さん、子供、お手伝いを連れて、できるだけ長く自分のもとに滞在してください。これを遺言の重要な一節と思って欲しい」と書かれていた。「私の家をひと時でもいいから、賑やかにして欲しい！これが私の切なる希望です。私の人生で最も重要なことです。今が最も重要な時期なのです。我々のところに集まって、一緒にその意義を考えよう。（…）君を心配させるもの、それを取り除く力が私にはあります。（…）高貴な人たちとのつながりが必要なのです。（…）私の幸福に欠けているのは君たちだけです！」

ビューローが若い頃から作品を「神のように尊敬し」、生涯に出会った他の誰よりも情熱的かつ熱狂的に愛したヴァーグナーからこうした言葉が発せられたこと、ヴァーグナーのそばで仕事をするには、長年抱いてきた夢の実現を意味するに違いないこと、ベルリンにはそもそもビューローを引きとめるものが何もなかったことを考え合わせると、ビューローが躊躇し、長く心が揺らいでいたのは、不自然に思われる。ビーブリヒでの夏、彼の妻とヴァーグナーとの間の心のつながりに疑念が生じていたからであろうか〔1862年夏、ビューロー夫妻はヴァーグナーの住むビーブリヒに数週間滞在した〕。おそらく、無意識のうちにビューローの心の中で自己保存と自己主張への生来の本能が働き、ヴァーグナーから強く期待された「承諾」の返事をすぐにはできなかったのであろう。

ビューローは7月7日、やっとシュタルンベルクに到着し、まずは交渉が必要だったので、国王に紹介されて御前演奏し、すぐに国王から食卓に招かれる栄誉に浴した。国王からの印象は申し分なく、二千グルデンの報酬での御前演奏家としての申し出を受け、ミュンヘンへ転居することになった。こうした話が数日の間に進んだのは、ビューローが到着後すぐにリューマチ性の熱で体が麻痺し、ベッドで横にならなければならなかったからだった。ビューローはまずヴィースバーデンでのコンサートとカールスルーエでの作曲家集会への参加を断念する必要がある。ヴァーグナーの不参加で深く失望していたリストのことを思うと、心が痛んだ。ビューローが病気のためにミュンヘンのホテルで横になっている間、コージマは使者としてカールスルーエの父のもとへ赴いた。カールスルーエではラサールのジュネーブからの8月9日付電報がビューロー宛に届いていた。内容は「14日、貴方と話をするためだけにカールスルーエへ行く。貴方の友情を請わねばならない。貴方がいないと恐ろしいことが起こるだろう。命に関わる問題。貴方の愛を当てにする」。数週間後、フランツィスカ〔ビューローの母〕は娘に手紙を書いた。「ラサールの話はおぞましい。ハンスがショックを受けるのではと心配です。電報を受け取らなくてよかった。彼を救うことなど、不可能だったでしょう」。その少し前、ビューローはラサールにヴァーグナーと相談する機会を提供した。ヴァーグナーの働きかけで、ラサールはヘレーネ・フォン・デニグスとのロマンスが有利な方向に変わることを期待した。8月31日、ラサールは

ルーマニア人ヤンコ・フォン・ラコヴィツァとの決闘で、致命傷となる銃弾を受けて死んだ。その後、ヘレーネはラコヴィツァと結婚した。こうしたスケールの大きい人物を突然に、しかもこのような流れで失ってしまい、まだ病気で苦しんでいたビューローは当時、強いショックを受けたに違いなかった。ベルリンの家の整理とミュンヘンでの生活の準備にも追われ、回復するには数ヵ月かかった。「魅了してやまない尊敬する巨匠と義父」の強い説得で、ミュンヘンでの生活への賽は投げられた。

国王とヴァーグナーの間の関係の異常さによって生じた状況は、ヴァーグナーに呼ばれた者たちにとっても危険であり、慎重さが要求されることは、親しい者たちの間では、誰の目にも明らかだった。ビューロー自身もそのことを完全に認識していた。ミュンヘンの人々は優れた芸術活動を享受していると自負していたし、ヴァーグナーに敵対する自分たちの音楽監督フランツ・ラハナーを敬愛していた。ミュンヘンの人々の多くは、若くして突然権力を握った国王のヴァーグナーへの激しく燃え上がった熱狂を、王侯の気まぐれの発露と感じた。ヴァーグナーの偉大さを知る者はほとんどおらず、むしろ革命家的な性格、尊大で傲慢な態度、驚くべき浪費癖で知られていた。国王がヴァーグナーの負債を肩代わりし、家を贈ったことまでは、まだよかった。しかし、建築家ゼンパーに祝祭劇場建設のための設計が委嘱されたり、これまで一度も存在しなかったような芸術プロジェクトが実現に向けて動き出したり、しかもそのプロジェクトが、既存の施設で満足していた人々にとっては、思い上がった新しがりどころか、まったくの誇大妄想に思われたこともあり、俗物市民たちの嫉妬に満ちた驚きもさることながら、王室国庫への強い不安まで引き起こした。大臣フォン・デア・プフォルテンが管轄する王室国庫は政治的には反動勢力で、バイエルン憲法を無効にする目的のためにヴァーグナーを利用できないとわかったと、ヴァーグナーと戦うことを決意し、新聞を使って絶えず非難攻撃するといった手段さえ用いた。政治的かつ詐欺的な陰謀で、ヴァーグナーと彼の「共犯者、すなわち汚名を着せられた山師たち」をとがめないものはないと、当時、イタリアの新聞で報道された。こうした攻撃に対し、ヴァーグナー自身が公開の場であるアウクスブルクの「アルゲマイネ・ツァイトUNG」紙で一度だけ発言した（1865年2月22日）。またある日、ビューローはヴァーグナーから同じ新聞に、「王室との関係の濫用」という強い非難は「恥知らず

な誹謗中傷である」と説明するように依頼された。「この新聞を最上級の『アラーゲマインステ〔最も下劣〕』紙と呼んでも不当ではないでしょう」とビューローは〔母宛の〕手紙で書いている。

こうした敵意に耐えなければならない状況は、前年の夏から肉体的にもずっと苦しかった。シュノル・フォン・カルロスフェルトは当時、ビューローを「ずっと病氣」だと思い、「客人を温かく迎えず、よそ者に対して不信感をもつ」ミュンヘンの「激情に駆られる土壌」をビューローのために危惧した。ヴァーグナーに敵対する一派は、三つのグループで構成されていたという。まず第一に「内閣の廷臣たちで、ヴァーグナーをローラ・モンテス〔ルートヴィヒ2世の祖父ルートヴィヒ1世の愛人〕のように思い、政治的な影響力を滑稽なほど恐れていた。二番目の一派は僧侶たちで（…）、教会の闇を敵視する人物としてヴァーグナーを恐れていた。三番目の一派は音楽家たちで、ラハナーが先頭に立っていた」。ここまでがシュノルの話である。

3月になるとビューローの体調も次第に回復し、演奏旅行もできるようになった。ミュンヘンでは三回のピアノの夕べを、生粋のバイエルン人プラーテンの記念碑建立のために開催した。こうした活動で苦労しながらも気力を回復し、4月10日、三人目の娘イゾルデが生まれた日には、《トリスタン》のオーケストラ・リハーサルを始めることができた。ヴァーグナーも参加しての二十回以上のオーケストラ・リハーサルにより、「期待され希望されるように円滑に」ゲネプロの日が5月11日に定められた。その直前、オーケストラピットを広げるために最前列の席を三十席つぶさなくてはならなくなったとき、極度に疲労し神経過敏になっていた指揮者ビューローの口から、「ブタ野郎の三十人ぐらい、どうしたというのだ」という言葉が思わず漏れた。この口汚い言葉はすぐに広まった。反響は大きく、軽率だったビューローはミュンヘンの「ノイエステ・ナーハリヒテン」紙への手紙で弁明しなければならなかったが、人々の怒りはなかなか静まらなかった。残念だったのは、ビューローの露骨な発言が敵対者たちに、ビューローを攻撃することで、彼が密接に関わっていた上演そのものをおびやかす口実を与えたことだった。

こうした驚愕の出来事が冷めやらぬうち、さらにひどい事態が発生した。イゾルデ役の歌手〔トリスタン役のシュノル・フォン・カルロスフェルトの夫人マルヴィーネ〕がゲネブ

口のあと喉を故障し、初演が5月15日から6月11日に延期されることになったのだ。各地から急いで訪れた客人たちの多くは、この日まで待つことは不可能だった。こうした不運な出来事、それに伴う忍耐と神経を使う試練を経て、ようやく上演された作品は作曲家自身はもちろん、国王、大勢の芸術家仲間たちに圧倒的な印象を与えた。「今世紀の最も重要な芸術的出来事」と、ビューローは初演に來られなかったコルネーリウスに手紙で書いた。「貴兄はヴァーグナーの間近で生活するのは、本当にマンサニリア〔樹液が猛毒の植物〕の香りを吸い込むようなもので、自分の芸術的個性やその内的発展が失われると思っているのですか？（…）金銭についてはここでは話題になっていません。貴兄にも私にもあまり多くはなく、私は年俸をこの三ヵ月で稼いだようなものです」。コルネーリウスは「無条件に」非創作的になるのに抵抗し、自分の創作力を守るには「純粋なヴァーグナー主義者から離脱」することが必要だと感じ、ビューローの仲介を感謝しつつも、ヴァーグナーからは距離を置く自分を次のように述べている（1865年8月10日）。「私はカノッサのハインリヒ4世です。私は表現不可能なほど注意深く用心しました。（…）ビューロー家はヴァーグナーとすっかり一体化してしまいました」。

ビューローは終わりを迎えた「ヴァーグナー・シーズン」について、うれしそうに報告している。四回目の最後の《トリスタン》公演の他に、国王のための「内密の」コンサートが開かれ、《ニーベルングの指環》と《マイスタージンガー》からの断片が、シュノルの見事な歌で披露された。ヴァーグナーの改革案に対して大臣の抵抗が感じられるようになっていたとはいえ、彼の「選ばれた家族」の気分は当時、国王への信頼と未来への期待に満ち溢れていた。シュノルの出演も、この信頼と結びついていた点が大きかった。それだけにシュノルの突然の死〔7月21日〕によって、関係者は壊滅的な打撃を受けた。「あまりに理想的、完璧に過ぎたので、誰か犠牲者が出て倒れなければならなかったのです」とビューローは嘆いた。1865年9月中旬、ビューローはヴァーグナーについても報告している。「数週間はすっかり打ちのめされ、最近やっと仕事の手につくようになりました。ありがたいことに、また猛烈な勢いで仕事しています。もちろんすべての予定は延期され、まだ日程も決まっていませんが」。

8月のベスト音楽祭〔ブダとベストが合併してブダベストになるのは1873年〕では、リストの《聖エリーザベト》が作曲家の立ち合い〔と指揮〕のもとで初演されたが、リストはローマでその頃、司祭叙階を受け、聖職者になったばかりだった。ビューロー自身も足を運んだ「この音楽祭は、本当に祝祭的雰囲気満ちていた」。ミュンヘンに戻ると、ビューローは「音楽学校」の準備に専念したが、この学校は「見事な模範演奏を聞き、練習、試験、発表を絶えず繰り返すことで、優れた音楽演奏を学ぶ、一種の音楽アトリエを目指していた」。しかし、ずっとこの仕事に没頭することは許されなかった。再度の演奏旅行で、11月5日からクリスマス直前までミュンヘンを離れることになったが、それは「生き続けるのに必要なものを演奏によって得るためだった」。その演奏旅行中、ヴァーグナーに敵対する行為が、「フォルクスボーテ」紙での攻撃の形をとって現れた。内容は、ヴァーグナーの贅沢、国庫からすでに支出された莫大な金額を攻撃するものだった。侮辱されたヴァーグナーは身を守るため、国王に対して攻撃の首謀者である内閣を責め、内閣の改造を求めたが、国王はそれには応じなかった。「まだその時期ではありません。貴方は『フォルクスボーテ』紙の記事など気にしないでいいのです。わが愛する友人よ。（…）闇の力など、我々の堅固な戦車で撃退されます。貴方の忠実なるルートヴィヒ」。

このように賢明に自制するように要求した国王の願いも、効果はなかった。というのは、11月29日付「ノイエステ・ナーハリヒテン」紙（333号）に、〔ヴァーグナーによる〕匿名の記事が発表されたからだった。記事の内容は、このような攻撃は、バイエルン国民から少しも敬意を受けることがなく、バイエルンから追放されなければならない数名の連中の、きわめて卑劣な個人的利害の戯れに過ぎないというものだった。この激しい主張は鬭争を激しく再燃させ、その結果、ヴァーグナーは敗れて、国王の命令で三ヵ月間、ミュンヘンから追放されなければならなくなった。コルネーリウスは次のように書いている。「このような記事を書くことを、思慮深い友人たちなら、もちろんビューローでさえ、ヴァーグナーに思いとどまるよう説得したでしょう。しかし、ヴァーグナーは明らかにビューロー夫人と一緒に、彼女にそそのかされて執筆し、口述し、文章を整えたのです。こうしたヴァーグナーとコージマの関係から、夏のヴァーグナーの私に対する態度をやっと理解しました。どの手紙も彼女によって

読み上げられ、説明を加えられ、あるいは隠匿されました。要するに、完全にヴィトゲンシュタインの学校だったのです。もうヴァーグナーと二人だけで話をすることはできず、訪問客を受け入れるか拒むかは、彼女が決定しました。彼女の支配がバイエルンの国境の外にまで及んでくるのは、まっぴらごめんです。そんなことになれば、ヴァーグナーにとっても邪魔になるし、全世界に怒りを引き起こすでしょう」。12月10日にヴァーグナーがミュンヘンを立ち退いたあと、コージマは自分の家には戻らず、ヴァーグナーの家に行くべきだったかもしれない。「しかし、ビューローはどうなるのでしょうか？ 彼は自分の妻を、ロマンティックな理解のもとに、ヴァーグナーに完全に委ねてしまうのでしょうか？ 列車でのヴァーグナーの抱擁はそのことへの感謝の表現なののでしょうか？ ハンスとコージマの間は、もう長い間、本当の夫婦ではなかったように思われます。そうでなければ、ハンスの振る舞いはとても説明が付きません」。

ヴァーグナーはジュネーヴへ赴き、そこで住居を見つけ、1月下旬、南フランスでの短期滞在中、突然の妻〔ミンナ〕の訃報を耳にした。この出来事も「フォルクスボーター」紙は誹謗中傷の材料に利用した。「ヴァーグナーが妻を飢えさせた」という報道の誤りを、ビューローは公開の場で正してきたが、これはヴァーグナーへの深い思い入れから出た行動だった。さらに彼の妻がミンナの葬儀の当日、輝くような白いドレスを着て劇場に姿を見せたというアウクスブルクの「ポストツァイトUNG」紙の報道にも、事実無根であること、プライベートな行動を公開の場で批判することの不当性を立証した。同時にビューローは親しい知人に、「妻は八日間、ジュネーヴに行き、哀れて偉大な孤独男をもてなしています」と報告している。4月5日、コージマはビューローに《マイスタージンガー》第1幕のフィナーレを持ち帰った。「うっとりするほど素晴らしい。どの点から見ても、才気が明るく沸き立っている」。5月13日、ビューローは次のように記した。「妻は子供たちをルツェルンへ、夏を過ごすために連れて行きました。おそらく、22日を過ぎるまで、哀れな孤独男をもてなし、6月初旬、いわゆる模範上演が近づいてきてから、こちらに戻ってくるでしょう。7月初旬、我々是一緒にルツェルンへ行きます」。ルツェルンではヴァーグナーはトリプシエンの別荘に住み着いていた。

ビューローの芸術活動は、この半年間で充実の頂点に達した。三回のピアノ・リサイタルがバルテンキルヒェンで焼け出された人々のために開催され、大好評を博した〔1866年2月17日、2月27日、3月6日〕。リストの《聖エリーザベト》は温かく受け入れられ、国王からも感謝され、新聞でも称賛された〔1866年3月1日〕。「こんなことはベルリンでは不可能です。オーケストラが私とともに指揮者以上に成長するのです」とビューローは記した。残念ながら、ヴァーグナーの誕生日〔5月22日〕に国王がトリプシエンを訪問したことにより、ミュンヘン市民の火山が噴火するような怒りが、また強く感じられるようになった。ヴァーグナーが戻ってくるのではないかと不安がられたり、彼の信奉者たちが攻撃されたりした。ビューローは「絶え間なく名誉を侮辱」する「ノイエ・バイエリッシェ・クリア」紙を告訴したが、被告に対する「極端に少ない刑量」で甘んじなければならなかった。ビューロー夫人とヴァーグナーの関係について侮辱的な記事を書いた「フォルクスボーテ」紙の編集者は、ビューローから決闘の申し入れを受けたが、拒否した。コルネーリウスはビューローによって公開されたミュンヘンの6月3日付「ノイエステ・ナーハリヒテン」紙の「説明」を非難したが、そこには「どの言葉にも心の支えを失ったような心情」が書かれていた。しかしコルネーリウスは次のようなコメントを付け加えている。「ビューローは高貴で優れた性格の男です。この情事において、彼が犠牲者であるのを私は残念に思います。(…)今回、新聞という公開の場で、きわめて侮辱的な調子で語られるのを彼は聞かねばならなくなりました。リストは娘がヴァーグナーのもとへ走ったことに腹を立てているといった、友人とさえ話さなかったこと、彼の口からさえ発せられなかったことまでもです」。

1866年5月12日、コルネーリウスは「ビューローのところで我々は昨日、重大な問題について話をしました」と報告している。それは主に〔劇場監督の〕ペルファルと彼の不十分な上演手段への苦情だった。「場合によっては、最後の土壇場で手を引くこともあり得るとのこと。それから家族が旅立った直後に、一通の手紙を開封したそうです。いつもはそんなことはしないが、ひょっとしたら妻にすぐに電報しなければならぬことが書かれているかもしれないと思ったとか。しかし彼はその手紙に驚いて、あのような状態になつたらしい。音楽学校やいろいろなことが、結局は実現しな



いのではないかと心配し、今の職を辞してイタリアへ行くかもしれないと言っていました」。ビューローは国王へ解雇願いを提出したが、寛大な返信が届き、「恥ずべき振る舞い」を罰することも可能なのだからと書かれていた。コルネーリウスの見解では、コージマ夫人への名誉棄損を公的に撤回する「人目を引くように装飾過多の長い美文調で書かれた」文章が公表されたが、国王がほとんど政治に関心を示さなかったとはいえ、バイエルンにとっては〔プロイセンとの戦争などで〕政治的にとても深刻な時期だったので、あまり注目されなかったようだ。ビューロー自身には国王の手紙は満足感をもたらしたようだ。ビューローはもちろん、国王の約束の実現を信じてはいなかったが、ヴァーグナーには10月まで待つことを承諾した。「音楽をやめることができれば！ やりがいのある新しい仕事を始めることができれば！」というような表現が、ビューローの嫌悪感の度合いを表現している。「プロイセンとイタリアの勝利、それが唯一の希望です」。

神のように崇拜する巨匠をできる限り援助したいという心の奥底からの要求と、夫や父としての立場を主張したいという衝動との間の心の中の葛藤が重なり、心身ともにぼろぼろだった時期の世間の出来事は、ビューローにはかなりの重圧となっていたのしかかり、外界への戦いにはほとんど抵抗する力もなかった。8月下旬、ビューローはラフに次のような手紙を書いた。「あれ〔君の手紙〕はもう手紙ではなく、本当の救いでした。しかし、この手紙が〔君にも〕私にも慰めや元気を与えることはもはや不可能です。何が起こったか、君は知らないでしょう。私が遭遇した身の毛のよだつようなこと、ぞっとするような話を口頭でお伝えすることは無理です。ましてや、手紙では」。

二ヵ月以上にも及んだトリブシェンでの滞在〔ビューローが訪れたのは1866年6月10日～9月1日〕では、強いショックを受けた感情も、ビューローの目の前で日に日に完成していく《マイスタージンガー》の輝きや見事さによって、ときには弱まったのかもしれない。その後はミュンヘンでの現実に戻るはずだが、ミュンヘンに戻るには、賃貸契約、家の家具調度、安全の問題について検討する必要があるあった。「〔ミュンヘンの音楽監督や音楽学校の仕事を〕断念するのも建設的な決定です」とビューローは語った。ビューローはバーゼルに移住し、妻子をヴァーグナーのもとに残し、「〔ミュンヘンで

の] 遠大な計画」を断念し、小さな規模で立派な仕事をする決心をした。ミュンヘンには「休暇」で処理してもらい、いつまた「住むことができる」ようになるか、時期を見計らうことにした。

ビューローはバーゼルですぐ、よい教師職を見つけ、室内楽仲間もできた。ブラームスやヨアヒムとも会い、ヨアヒムの理想的な演奏に、ビューローは圧倒された。「彼からは演奏芸術に関して、まだ学べるものがあります。そうした機会は他では得られません」。この印象が強く心に残り、交流が十年間中断していたあと、ミュールハウゼンで偶然に再会したとき、和解と抱擁の瞬間が訪れた。バーゼルの冬は穏やかで、前年の冬とは比べものにならないほど、気力を回復させてくれる滞在となった。ビューローが重要なコンサートを開いたとき、「小さいが快適なバルコニー付の部屋」に妻が訪れた。「1月8日、長老たちと一緒にでした」。こうしたエピソードを強調するように友人たちに報告した。[1867年] 1月1日、ビューローはチューリヒで妻とヴァーグナーに会い、ミュンヘンの祝祭劇場のゼンパーによるモデルを国王に送る前に検討した。

2月中旬、ビューローは思い切ってトリープシェンに赴き、コージマの四人目の娘エーファの17日の出産にいわせせた。その前に彼は「私の愛する妻は、残念ながらまったく気分が優れないので、本来なら喜ばしい出来事を、憂慮せずに待ち受けることはできません」と報告している。しかし、これは仮面だった。背後に隠された感情は、信頼できる人の口に何度ものぼった次のようなやり取りが示している。ビューローは妻のベッドで涙にくれながら、「許してあげるよ」と言った。それに対し彼女は「必要なのは許すことではなく、理解することです」と答えたという。

「ヴァーグナーは上機嫌です。《マイスタージンガー》の作曲が完成しました」とビューローはトリープシェンから報告している。<sup>(1)</sup> 1867年初頭、フォン・デア・プフォルテンが失脚し、クロートヴィヒ・フォン・ホーエンローエ侯爵が外務大臣として業務の処理を引き継いだ。これにより、ヴァーグナーとビューローの立場は決定的に変化した。ビューローはバイエルン宮廷楽長と新設の音楽学校の校長に任命されたあと、

(1) 1867年2月20日付ドレーゼ宛書簡。《マイスタージンガー》の総譜の完成は10月24日なので、これは2月7日に第1全曲草稿が完成したことを指す。

3月にはもう、ミュンヘンへの転居を願い出ることができた。ビューローは「国王だけが上司」となり、その立場で音楽学校の準備に取りかかった。また、一方的に「新ドイツ楽派の方向」に邁進しているというラフの自分への偏見（「ああ、何と愚かなことよ」とビューローは嘆息している）に対して抗議した。ビューローはむしろ、「自分が身を置いている音楽共和国の小さな居住地での秩序と正当性を確立する」ことを望んでいた。ヴァーグナーはルツェルンの家を空けて、ときどきミュンヘンを訪問し、ビューローの大きな家の独立した二つの部屋を使用した〔ビューローは5月からミュンヘンのアルコ通りに転居〕。

〔1867年〕6月10日に予定された《ローエングリン》の新演出上演の準備にはヴァーグナー自身も関わった。残念なことに、配役の問題に国王が介入したことから、面倒な事態が生じた。主役ローエングリン役のために特別に招聘されたティハーチェクは、ドレスデンの《リエッツィ》の時代からのヴァーグナーの忠実な友人で、ヴァーグナーとビューローから「輝かしい声の持ち主」と呼ばれ、オルトルート役の女性歌手も「優れた歌手」と評価されていた。しかし国王は「みじめなティハーチェクを絶対に聴くつもりはない」と注文をつけ、オルトルート役に関しても「とても不満」と語った。国王は日曜日の上演に、自分のイメージする「ローエングリン」を望んだ。「反対する者（ヴァーグナーとビューロー）に対し、自分の断固たる意思が実現されることを強く望む」。結局、王の意向は達成されたが、信頼する歌手への侮辱に機嫌を損ねたヴァーグナーは、上演前にルツェルンへ戻ってしまった。ビューローは国王の命令に従い、フォーグルとトーマという二人の歌手と一日十時間の練習を二日間行なった。ビューローは《ウィリアム・テル》と《トロヴァトーレ》も完璧に上演し、ヴァーグナーだけに偏ってはいないことも証明した。これは出版社E.ボックへの当時の報告の裏付けもある。「ミュンヘンでは古典的なオペラの演目が模範的上演で長期間、レパートリーとして根づくようになるまでは、新作オペラの推薦は見送られます」。ビューローは「ドイツのどの劇場も、ここほど精力的に活動しているところはありません」と別の機会にも書いている。「三つの新しいオペラをいつも同時に練習、あるいは昔のプロダクションを再演します。再演には大まかだが重要な仕事が必要です。（…）一年以内に我々のオペラ、我々の音楽学校が形を整えるでしょう」。一方で、

問い合わせの依頼には、誇らしげに返答している。「我々の学校のカリキュラムはどの点から見ても模範的で、H氏のご令嬢様の音楽的な専門教育をこのコースにすっかり委ねても、懸念する必要はまったくありません」。

それでも、昔の扇動家たちがまだ敵意を失っていないことを、王室側近の意地の悪いコメントが証明している。7月にパリ万国博での各国の軍隊音楽の審査員としてビューローが招聘されたとき、「芸術の国バイエルンが、音楽王国の芸術通ではなく、プロイセン人を派遣しなければならないことを心から喜ぶ」というような皮肉が言われた。

翌1868年の大きな出来事は、《マイスタージンガー》初演の準備だった。新しくハノーファーの劇場の総監督に任命されたハンス・フォン・ブロンザルトの、この作品を上演したいという希望によって、ハンス1世とハンス2世の交友関係も修復された〔リストがヴァイマルでビューローをハンス1世、ブロンザルトをハンス2世と名づけた〕。

アントン・ルビンシテインも1867年末、ミュンヘンに客演し、「自分の年齢に見合ったいくばくかのお金を得る」ルビンシテインの計画を支援する依頼をビューローは受けた。真に模範的な同僚としてのよしみから、ビューローは依頼に応じた。宮廷楽団の無料での共演は内閣の問題となったが、ルビンシテインの優れた室内楽作品の王立音楽学校の教授たちによる演奏が企画され、ルビンシテインの勝利とともに、当時のミュンヘンでは前代未聞の収入を得ることができた。ビューロー1892年、「自分に感謝状のようなものを授与するとすれば、ピアノの前ではリストの唯一の天才的後継者である芸術上の同時代人〔＝ルビンシテイン〕のための職務の遂行が筆頭に挙げられる」と回顧している。しかし、それから50年も過ぎた今日、ルビンシテインのビューローへの感謝の言葉を探しても無駄である。ビューローの逸話、雑談、思い出などが語られるときは、ビューローの存在の偉大さを誤解させるような発言だけが取り上げられる。

《トリスタン》に続く、1868年6月21日の《マイスタージンガー》の初演は、ミュンヘンでヴァーグナーが活躍した時代の頂点となった。「比類のない勝利」とビューローは電報文のように記した。同時代の音楽家はほとんど立ち会った。ヴァーグナーは貴賓席で国王の左に座り、そこから各幕の終了後に歓呼する観客に答礼した。ビュー

ーローはベルリンへ「アウグストゥスの隣のホラティウス」<sup>(2)</sup>と電報を打ったが、この言葉はすぐに世間に広まった。1899年夏、ミュンヘンで《マイスタージンガー》が上演された際、ミュンヘンの6月27日付「ノイエステ・ナーハリヒテン」紙は、初演時の驚くべき完璧な上演に言及した。「このような出来事は芸術生活での輝かしい光明である。この光明はあたり一面を照らし、諸国家は驚くべきことに、芸術の精神がこうした荘厳な時間を祝うことが許された場所に目を向ける」。このような芸術的成果の輝かしい時代の影響で、ビューローはアメリカ訪問の申し出や、相性のいいパリからの訪問の申し出があったが、ビューローはどれも断った。「ここにいたいのは、ミュンヘンでは多くの精神的財産がすでに投入されているからです。(…)おそらく、世界的に見ればロバのような愚行かもしれません、しかし、私はドイツのロバです。ここに（仕事で）とどまるつもりです」。

「天よ、私が他人のためにお金を稼ぐことができるとは！」と1868年のクリスマスに、満足気に叫んだ。ニュルンベルクでの二回のハンス・ザックス記念コンサートでは千五百グルデン、アウクスブルクでの少年施設のためのコンサートでは七百五グルデン、「バイエルンでは私は決して自分の利益のためにコンサートはしない」と当時、ビューローは表明した。ビューローの作曲したバラード《歌人の呪い》のミュンヘンでの不評[1868年12月25日に演奏された]は、ビューローとコルネーリウスの間でクニッテル詩節での愉快な手紙のやり取りを生んだ。諦念の気分に満ち、他所でも見られる当時の告白に似ている。「私は創作を断念しなければならなかったので、立派に創作されたものの演奏活動に専念しました」。しかも、音楽以外のものをすべて排除して。「どうして君は、私が、あるいは我々（ヴァーグナーも含めて）が音楽以外のことに

(2) ウォーカーはこの表現に対し、次のように注釈している。「古典文学の知識を持ったビューローだけが、こうしたフレーズを生み出すことができたのであろう。(…)ラテン文学の偉大な詩人ホラティウスは早くからローマ軍に参加し、参謀将校としてブルータスに仕えていた。フィリッピの戦いではのちにローマのアウグストゥス帝となるオクタヴィアヌスと戦った。大赦の恩恵を受け、ホラティウスはアウグストゥスの味方となった。ホラティウスの諷刺文学はアウグストゥスに称讃され、土地や金、名誉を受け渡された。ホラティウスには相続人がいなかったため、彼はそれらをアウグストゥスに遺言で譲った。ヴァーグナーとルートヴィヒ王の関係も、信じられないほどよく似ていた。ヴァーグナーには法的相続人がひとりもいなかった。コージマとはまだ結婚しておらず、二人の子供は法的にはビューローのもとにあった。ヴァーグナーにとっての合法的な「子孫」は作曲した作品だった。その中の最も重要な作品群はすでにルートヴィヒに遺贈されていた」。Walker, Alan: Hans von Bülow. A Life and Times. Oxford. 2010. P. 151.

関与してきたり、していたり、これからもするつもりだと思っているのでしょうか（ラフ宛）。私は音楽だけに打ち込み、政治、美学、文学、ましてや陰謀に身を入れるつもりはありません」。

10月18日、「陛下の命により」地元スタッフで《マイスタージンガー》が新たに上演されることになった。「陛下が不機嫌だった」のは、オクトーバーフェストの初日4日には上演できないからだった。ビューローはヴェーバーの《オイリアンテ》の上演の準備を念入りに進めていたが、その上演の直前に国王により上演計画が妨害された。しかしビューローは、こうした干渉に怒ることもなく、むしろ好意的だった。「国王の命令に我々は従わなければならないが、それは悪いことではありません。専制君主がいなければ、物事が前に進みませんから」とビューローは語り、こうした発言を繰り返すことで、彼の民主主義の理論に反する立場にも理解を示した。

ビューローは11月中旬、《マイスタージンガー》の八回目の上演が行われたことを満足気に確認し、音楽学校<sup>(3)</sup>の成果を報告している。古典演劇の上演で間奏曲をカットし、冒頭に価値のある序曲を演奏し〔ゲオルク・フィアリングが作曲した《メアリ・ステュアート》の付随音楽〕、観客を劇の世界に一気に引き込もうとした話も報告した。ロソ夫人宛の手紙では、彼女から送られたピアノの生徒ブオナミーチを称賛した。「彼の太陽のような性格と能力は、ミュンヘンの男性のクラスのドイツの霧をフィレンツェの空の光で魔法のように照らしてくれました」。ビューローは親身なロソに現在と過去のつながり、すなわち〔ロソとの〕幼少時からの運命的なつながりについて熱狂的に語りながら、1869年1月9日の誕生日の手紙に感謝して、彼の心の底に絶え間なく流れている感情が漏れ出た。「貴女は『尊敬の念をもって』と書いてくれています、どうしてそう書けるのか、ご存じですか。おお、どうして貴女がここにいないのか。貴女は私に多くの慰めを与えてくれ、精神的に元気づけてくれました。私は貴女から、貴女のエリート性格から多くを学びました。私が貴女に《諦念の人々》を献呈したとき、運命が我々に素晴らしい心の交友を残してくれるとは、思いも予感もしま

(3) 《マイスタージンガー》の全八回の上演日程は、1868年6月21日（世界初演）、6月28日、7月2日、7月7日、7月12日、7月16日、11月7日、11月8日。直前に引用されている10月3日付ラフ宛書簡では、10月18日に上演すると書かれているが、11月に延期になったものと思われる。Birkin, Kenneth: Hans von Bülow. A Life for Music. Cambridge. 2011.

せんでした。(…) 貴女には私が狂気で、精神病院に行く必要があると思いますか。そうでないといいいのですが。私は理論的な理想主義者であると同時に、実践的な現実主義者です。二ヵ月前から私は体力を回復し、新しく生まれたような、自己をまた取り戻したような感じがしています。私はきちんとした仕事をいろいろするつもりです。貴女がそれを見たら、私が狂気ではなかったことを認めるでしょう（ほとんど紙一重の問題ですが）」。

ビューローが運命の年である 1869 年の初頭、自分の状況をどのように克服したのか、上記の手紙に見られるように、やっと獲得した心の平静をどのようにして維持できると考えたのかは、まったく想像すらできない。二人の非嫡出の娘イゾルデとエーファが生活し、ヴァーグナーの三人目の子供である男児が 1869 年 6 月に誕生した。それにもかかわらずヴァーグナーは友人たちに、コージマとの関係は純粋に友情的なものであるとして、虚構の生活を維持することを要求した。しかし、コルネーリウスに対しては「真の犯罪」と正反対のコメントをしたり、「ビューロー夫人の名誉がまた傷つけられたことで、永遠にミュンヘンと縁を切り、彼女に加えられた憎悪によって名前と名誉が汚されようとしている男と離婚する話を進めなければならなかった」と苦情を述べたりもした。1867 年 9 月 30 日付のヴァーグナーの手紙での次のような発言がなければ、こうした考え方や感じ方に身を置くことは難しいであろう。この手紙は、スポットライトのように「二人の強大なエゴイスト」— ヴァーグナーとコージマに親しい人物がそう呼んだ — の心の中を照らしている。

「親愛なるハンス、たった今、《ニルヴァーナ》<sup>(4)</sup>を改めて研究した。君は本当に風変わりな人間だ。一人前の作曲家であるのは君には何と難しいことか。しかし、君が私にいかに近いか、私が君にいかに依存しているか、それを私にはつきり語りかけてくる。君が自分の運命を理解してくれたら！ 君が運命に屈するとすれば、君の心や精神が、あまりにも輝かしい模範を志向しているからであろう。君の若い時代のこの改訂された作品から、君の素晴らしい才能が明らかに見て取れる。どの観点からも、私にはこの作品を他のどの作品とも同列に置くことはできない。この作品は考える限

(4) 《ニルヴァーナ》(涅槃) は 1854 年、ビューローが 24 歳のときに作曲した管弦楽曲。



り最高の技巧を示している。ここに見られるのは、斬新な表現とデモーニッシュで明晰な表現だ。これを若い頃の作品と認めなければならないとすれば、戦慄が走る。多くのものが過剰で、不安に満ちている。さあ、ハンス、まさに君の今の心の状態だ。運命が君の心に偉大さと美とを求めたのだ。君の芸術家精神が目指している価値と同等のものを。この巨大な使命に屈してはいけない。それを認識しなさい。君の友人〔= ヴァーグナー〕の目を通して認識しなさい。勇気と誇りをもってじっと見つめなさい。君がそれに従っていけば、途方もなく高貴な模範に成長するに違いない。ハンス、それが重要なのだ。今はただ大事にして、賢く育てていだけだ。君は心の中から成長していけ。君が志向しているものに即していく以外に道はないのだし、これが比類のないほど高貴で素晴らしいことなのだから。君のリヒャルト・ヴァーグナーより」。

平素はつき合いがなくても、突然に近づいた一般の人々は、間近での空気を吸っていないとはいえ、ビューローの人生の避けることのできない破局を、以前から予期していた。例えば、ヴィーンのピアノ製造家ルートヴィヒ・ベーゼンドルファーは、《マイスタージンガー》初演時にビューローの家を初めて訪れたとき、二人の友人が別れるであろうことを見抜いた。そして、その衝撃から、その後はビューローの家に行こうという気にはならなかった。ヴァーグナーはコージマ夫人について（コルネーリウス宛に）「ためらうビューローに離婚を勧め、離婚のつらさを我慢するつもりがある」と記したが、結婚式の数週間前の1870年7月31日〔ヴァーグナーとコージマのルツェルンでの結婚式は8月25日〕のカール・クリントヴォルトのビューローへの報告の方がわかりやすいであろう。「私は短い間、よそよそしいほど大事にされ、最後は涙で見送られました。私が君のところからやって来て、また君と再会することを、皆知っていたのです。それゆえ、ここでの友好的な印象を君に伝えるべきでしょう。子供たちは元気で、幸せです。くれぐれも父によりしくとのことでした。ときどきは子供たちのことを思い出して欲しいと。ビューロー夫人からも私に、こうした心に残るような手紙を君宛に書いて欲しいと頼まれました。彼女はまず激しく涙を流しながら君に働いたひどい無礼への許しを請い、人生の最後の断末魔の苦しみで、この不実な行為のつらい思い出に悩まされ、君からの赦しの意識においてのみ苦しみは和らぐだろうと



語りました。(…)彼女はもう世間と接触するつもりはなく、彼女の仲間で慈善活動をし、人生の最後まで隠遁した生活を送るつもりです。父とも再会するつもりがないのは、これまでの出来事にほとんど関わってくれなかったことに彼女が怒っているからです。(…)ヴァーグナーからも、『親愛なるビューロー』への心からの挨拶を頼まれました。そもそも、皆が彼女の君への愛と尊敬、君の高貴な心について何度も語りました。まったく頭にくることですが。おそらく彼らは、最も高貴で犠牲的行為のできる人間のひとりと関わってきたのでしょう。彼女の恥ずべき裏切りはおそらく、わがままな人間に相応しいしっぺ返しを食うでしょう。このように彼らは君の旧友としてやって来た私に対して、謙虚で当惑したような感じを抱いていたようでした」。

その数日前、ビューローは友人ブロンザルトに国王へ辞職願いを出したことを伝えていたが、辞職はビューローの功績を慈悲深く認めることにより、給与は継続して与えられ、健康が回復したらまたもとの地位に戻るという希望を添えて認められたという。ビューローは自分の個人的な運命について、友人には以下のことしか語らなかった。「私の妻は私から別れ、子供たちと一緒にずっとスイスで暮らしました」。

### 【訳者付記】

ハンス・フォン・ビューロー（1830～94）は師リストの娘コージマ（1837～1930）と1857年にベルリンで結婚したが、本章ではそのコージマとの離婚をめぐる話題が中心となっている。ビューローの後妻マリーが前妻との離婚についてどのように記述しているのかも興味深いが、主観はあまりまじえずに、当時の書簡などの資料の引用を中心に、事実を淡々と記述している印象が強い。

ビューローのミュンヘン時代の業績としては、1865年6月10日の《トリスタンとイゾルデ》の初演、1868年6月21日の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の初演、その両方を指揮したことがまず挙げられるが、その間の1866年6月から1867年4月まではスイスに移住するなど、いろいろ紆余曲折のあった事情もわかる。

なお、1869年を「運命の年」と呼びながら、詳細についてはあまり触れられていない。ここで一連の流れを補足しておく、概ね以下の通りである。

- 1868 年 11 月 15 日 コージマは最終的にビューローのもとを去る決心をする。  
翌日から、四人の娘とともにトリープシェンに定住する。
- 1869 年 1 月 1 日 コージマが日記を書き始める。
- 6 月 6 日 ヴァーグナーとコージマの息子ジークフリート誕生。
- 6 月 15 日 ビューローにコージマが手紙で離婚の承諾とビューローの娘  
ダニエラとブランディーネの養育を委ねるように求める。
- 6 月 17 日 ビューローはコージマの申し出に同意。
- 6 月 20 日 《トリスタン》新演出上演をビューローが指揮。
- 6 月 22 日 ルートヴィヒ 2 世のための私的公演で《トリスタン》を上演。  
これがビューローのミュンヘン時代最後の指揮となる。
- 8 月 1 日 10 月 1 日までの 2 ヶ月の休暇を願い出る。
- 9 月 10 日 宮廷楽長の辞職願を提出。
- 9 月 12 日 ルートヴィヒ 2 世が辞職願を受理。年額二千グルデンの名誉  
年金の支給が認められる。
- 10 月 フィレンツェに居を定め、幼友達ジェシー・ロソの歓待を受  
ける。  
その後の数年間、イタリア国内で音楽活動が続ける。
- 1870 年 3 月 離婚手続きのため、4 週間、ベルリンに滞在。
- 6 月 17 日～7 月 20 日頃 離婚手続きのため、再度ベルリンに滞在。
- 7 月 18 日 離婚が正式に認められる。
- 8 月 25 日 ヴァーグナーとコージマはルツェルンのプロテスタント教会  
で正式に結婚。